



駿府と今川氏

第17回

駿府の文化を享受した女性

懸賞も出された十炷香

いまは茶道、すなわち茶の湯に押されてあまり盛んではないが、今川氏の黄金時代には駿府において香道、つまりお香を焚くことが流行していた。

特に駿府今川館の中では、今川氏親の正室で、氏輝・義元の母にあたる寿桂尼ら女性たちが十炷香と呼ばれる香を楽しんでいたことが、当時、駿府に滞在していた京都の公家山科言継の『言継卿記』からうかがえる。

この十炷香というのは、あらかじめ香木を切ったもの四種類を用意し、一、二、三の三種の香を各々三個ずつ紙に包んで揃えておき、それとは別に「客」と称する四種目の香をやはり紙に包んで一つ準備をしておく。そして、この十個の香を順不同に焚き、その香りの異同を判別するわけである。

香道などというと、何となく厳粛な雰囲気で行われたような印象を受けるが、そんな厳粛なものではなく、当てた数の一番多い人が勝ちとなる一種のゲーム感覚の遊

びで、実際、ただ一番・二番を競うだけでなく、懸賞が出され、一番多く当てた人が一番たくさん賞品を手にしたというから、まさにゲームそのものだったと言ってもよい。

他に、上層階級の女性たちの間では生け花も盛んだった。八重梅・紅梅・紅葉・龍胆・金銭花などを生けて楽しんでいたのである。

女房狂言一座の興行

お香やお花は上層階級の女性だけで、庶民の女性は享受できなかったわけではない。では、一般庶民たちにはどのような文化が享受されていたのだろうか。

『言継卿記』に、駿府の新光明寺の境内で開かれた勧進の女房狂言のことが見える。これは勧進、すなわち新光明寺が寺の新築か増築・改築にあたり、その建設資金を得る目的で女房狂言一座を招き、興行させたときのものである。

具体的にみると、弘治三年（一五五七）二月十二日から六日間にわたって女房狂言が興行され、初日は五〇〇人から六〇〇人ほどの見物人だったものが、日を迫うにつれ評判を

聞いて集まったものと思われ、二日目には一四〇〇人から一五〇〇人くらいに膨れ上がったと言う。女房狂言は字の通り、女性だけが演じる芝居である。有名な出雲阿国の始めた阿国歌舞伎のルーツともいべきもので、庶民の楽しみであった。『言継卿記』には見物人の男女比についての記載はないが、女性もかなり多かったものと思われる。



▲十炷香を楽しんだ今川家中

撮影：水野 茂